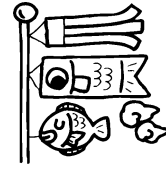




## ひよこだより

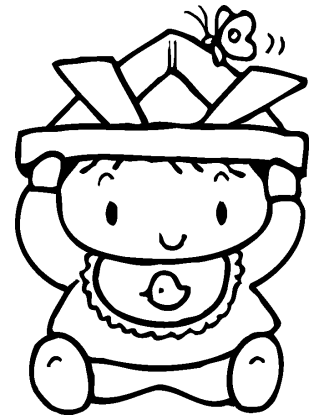


都立葛飾ろう学校 乳幼児教育相談

令和5年5月2日 NO. 2

### 子供の「わかる」を大切に

すがすがしい青空に、こいのぼりが気持ちよく泳ぐ季節になりました。ひよこ組の1歳児2歳児グループに参加の子供たちも、校庭のこいのぼりを見たり、色画用紙でミニこいのぼりを作ったりして、端午の節句にちなんだ体験を親子で楽しみました。連休中は、仕事も休みとなり、家族で過ごす時間が増える御家庭が多いことと思います。子供の興味関心に寄り添ってのんびり遊ぶ時間を、親子で楽しんでいただけたらと思います。今月号は、そうした家族時間の中で、聞こえない・聞こえにくい子供たちが、より「わかる」ためのひと工夫のお話です。



### 五感を使おう

ひよこ組の活動は、子供の日々の生活や体験がより豊かになるように、そのきっかけ作りのお手伝いをしたいと考え計画をしています。今年度の1歳児、2歳児のグループ活動は、いちごジュース作りからスタートしました。真っ赤ないちごのヘタを取り、砂糖や牛乳と一緒にミキサーにかけ、ジュースを作ります。子供たちは、みんな興味津々な様子でいちごを手に取り、おいしいジュースを味わっていました。

ミキサーを使ったジュース作りには、おすすめしたいポイントが4つあります。子供のよく「わかる」を考えるヒントにもなりますので、1つずつ見ていきましょう。

1つめは、食材の変化の様子が、目で見てよくわかることです。透明なミキサーのカップからは、イチゴと牛乳が入っている様子がよく見えます。始めは白い牛乳の中に、真っ赤ないちごが浮かんでいるのですが、ミキサーにかけるとあっという間に色がピンク色に変わります。一瞬の変化に、子供たちはびっくり。みんな食い入るように、ジュースの変化を見つめています。

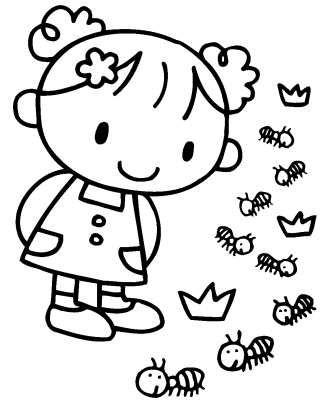


どんな風にいちごがジュースに変わるのか、子供たちにはまずは視覚を使って、その過程をよく見せてあげることが、「わかる」への第一歩です。

2つめは、ミキサーにかける時に、押さえた手からその振動が伝わってくることです。初めて体験する子供たちの中には、驚いて手を引っ込める子供もいますが、保護者の方と一緒に取り組むうちに危なくないことがわかり、ミキサーから手を離さずに、最後までその振動を感じている姿が見られました。自分の手で直接、物に触れて関わることで、触覚を通した理解を深めることができます。また「ぼくが、わたしが作った！」という主体的な気持ちを育てること

にもつながります。

3つめは、ミキサーから「ガー」という大きな音が出ることで、視覚と触覚からの刺激を同時に感じられることです。子供によって感じ方はさまざまですが、聞こえない・聞こえにくい子供たちにとって、聴覚からの情報は曖昧なものです。子供が幼ければ幼いほど、聞こえてくる音が何の音なのか、聴覚からだけの刺激ではわかりにくく、興味をもちにくいので反応がないように見えます。私たちは、音を耳だけで聞いているのではなく、脳で理解して聞いています。目の前でミキサーが動き、振動が伝わり、そして「ガーガー、音がするよ」と語りかけてくれる親しい大人の関わりがあることで、初めて「この音はミキサーの音なんだ」とわかるわけです。こうした実体験と、大人との関わりが積み重ねられていくことで、子供たちは意味のわかる音を学んでいき、学んだ音は知っている音として、興味を向けていくようになります。聞こえない・聞こえにくい子供たちにとって、音の情報がわかるためには、見たり触れたりよくわかる感覚をたくさん使いながら、その子供にとって十分な音量の音を繰り返し聞くことが大切です。



そのためには、子供に関わる身近な大人が、子供の聴力についてよく理解していることが必要です。補聴器や人工内耳を付けているとき、また外しているときに、どのような音がどれくらいの強さで感じられているのか、オーディオグラムから読み取れるように私たちもお伝えしていきますので、日常生活の中にある物音と結び付けて、子供の聞こえを考えていけるようにしていきたいですね。

さて、いちごジュース作りの最後のおすすめポイントは、やはりおいしいジュースの香りを感じて味わう体験ができるということです。食べたり飲んだりすることは、生きることの基本です。偏食があったり、食が細かったりする子供もいますが、自分が手を加えたものが食べられるという体験は、多くの子供たちにとって、とても魅力的な活動です。自分が苦手な食べ物でも、お父さんやお母さんが「おいしい、おいしい」と一緒に作ったものを食べてくれたり、友達がもりもり食べたりする様子を見るだけでも、その食材を知るための良い機会となります。

いちごジュース作りの時には、その工程の途中で、ジュースにする前のいちごをそのまま食べてみたり、砂糖を少しだけ舐めてみたりもします。幼い子供たちは、砂糖そのものを見ることも、日常生活ではなかなかありません。「甘いね」と親子で体験していきながら、保護者の方が手話も合わせて語りかけることで、「甘い」「砂糖」の手話も覚えていくことができます。

こうした五感をいっぱい使う体験は、子供の心と体の成長を促していきます。知識を増やし、記憶にも残りやすいことが記憶の研究からも知られています。そして子供たちが、自分の体験

を言葉へと結び付けていくためには、親しい大人とのコミュニケーションがその橋渡しとなります。子供の気持ちに寄り添った語りかけを、身近な大人から受けることで、子供たちは自分の体験を言葉で表すことを学び、言葉の世界を広げていきます。見るだけ、聞かせるだけでなく、ぜひ体をどんどん使わせて、親子でいろいろな体験をおしゃべりしながら楽しんで、「わかる」喜びを子供たちにたくさん経験させてあげたいですね。(担当：松澤)

